

# 土塊ノ協奏曲

Asfalt

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺は、ピアノが好きだった。そして、彼女がそれを聞いて笑うのも好きだった。

ピアノが好きならピアノで食べていこう。そんな甘ったるい決意を抱いて行った都会では落第ギリギリ。何も無くなってしまった俺に差し伸べられた手は、アイドル業界からだった――

これは、アイドルマスターシンデレラガールズの二次創作です。至らぬ点、異なる点は多数ございますので、1話を読んで無理だと思ったらブラウザバックをお願いします。

世界線がガン無視されていますが、どちらかというストーリーライトステージよりの世界線になってるんじゃないかなと思います。

また、感想・ご指摘などもお気軽にコメントでお書きくださいな。

次回更新予定日：5／3 21：30

## 目次

知らない間に幼馴染がアイドルになっていた	1
声をかけてきた女の子は本当に幼馴染でした	8
運営さん、水着の肇の実装はまだですか	13
人生の先輩の言葉はやはり重い	20
新社会人特有のアレと決意	27
浴衣と花火と夏祭り	34

知らない間に幼馴染がアイドルになっていた――

――懐かしい、思い出。

「それじゃ、おじいさん。行つてきます」

？そうやって俺が言うのと目の前の粘土まみれの翁は今までで一番輝いている笑顔を浮かべた。

「ああ、行つてくるといい。君のピアノが聴けなくなるのは非常に残念だが、これもまた運命だ」

その答えを受けて、俺は右隣にいる小学生に話しかける。

「じゃあな、肇。いい子にしてるんだぞ」

「……うん、わかった……」

やはりこの子は聞き分けのいい子だと思う。人の言うことを小学生形にもちゃんと聴いてくれるから。

「お兄さん……帰つて来てくれるよね？」

「そう言われるとよく分からないけど……ここには、岡山には必ず帰つてくるよ」

そう言つて頭を撫でると、安心した表情になるが涙がポロポロと零れているので、結局ぐしゃぐしゃな表情になってしまっていた。

「……じゃあ、行つてきます」

最愛の『家族』を後ろに残して、俺はタクシーに乗り込んだ。

「何やってんだろうなあ、俺」

故郷の岡山を出て、早7年……いや、もう8年か。好きなピアノをやると言い放つて東京に来て、音大に入り必死に頑張ってきたが、結局首席どころか留年ギリギリのライン程度しか取れなかった愚かな学生だ。他の奴らよりも遅い就職も全落ち、あとはひとつを残すところとなった。そのストレスのせいか、大学在学中よりも頬は痩せこけ、体重も10kg落ちるなどもあったが、とりあえず生きているならセーフだ。

『好きなことをやって生きていく』とか言う人も居た気がするが、俺がやってきた4年の音大生活は、そんな甘ったるい言葉で乗り切れるような甘いものではなく、つまりは血で血を洗うような戦争であった、ということだけは今の小学生たちには知って欲しい。

「……………」

ポケットに入れていたスマホが振動した。この揺れ方はメールだ。ロック画面を見れば『346プロダクション 合否のお知らせ』と書かれているメールが出てきた。どうせ落ちているんだろうな、と思いながらメッセージを開いてみる。

『346プロダクション 合否のお知らせ』

貴方は当社の就職試験に合格致しました。つきましては○月○日に以下の住所までお越し下さい』

目を疑った。今まで拒否しかされてこなかった弊害なのか、涙が溢れ出そうになるのを必死で堪えてしまうまで精神が疲弊したからなのか。

まあ、関係の無いことだ。明日からは346プロダクションとやらのアイドル事務所で働くことになるんだ、適当に準備をしておこう。

当日。俺は346プロダクションの建物の前に来ていた。中世の城のような建物の前で待ち合わせなど些か引けるが、確か、ここで待ち合わせのはずだ…………お、来た来た。

「すみません、遅くなりました。貴方が今回合格した『妹尾 畢』おわりさんでよろしいですか」

「ええ、俺で…………私であっていると思います」

身長190cmもあるのかという肩幅の広い男性がこちらに来た。身体がかなり筋肉質だなと思い、スポーツはなにかしていたのかと聞くともはやっていないと言う。

「なんというか、ほかの子達に付き合っていたらいつの間にか身体を動かすことばかりしていたもので…………あ、申し遅れました。私は346プロダクションの武内と申します」

そう言うとき、武内氏は首筋を搔く。さつきから何度も搔いている

ところを見ると癖なんだろう。

「じゃあ、改めまして……俺は、妹尾 畢つて言います。大学……というか音大ですが、そこではピアノを専攻していました。まあ、落第ギリギリでしたがね」

「ほう、ピアノですか……」

そう言うのと武内氏はスマホを取り出してフリック入力を始めた。何をやっているのかは聞かないでおこうとか考えてると、彼は打ち込み終わったのか、スマホをしまつて建物の中に入った。

建物に入ると、目の前には綺麗なエントランスが広がってきた。そこで見とれていると、緑色のレディーススーツを着た女性が歩いてきた。

「こちらが、アシスタントの千川 ちひろさんです」

「はじめまして、千川 ちひろと言います。よろしくお願ひしますね」  
「あ……よろしくお願ひします」

そう返すと彼女は笑顔で返してきたが、その笑顔を見ると何故か鳥肌が立った。多分あれ、魔王の笑顔とかそういう系統のやつだ。

「では、ここからは私が」

「では、お願ひしますね」

ここからは武内氏が居なくなり、代わりに千川さんが案内してくれた。外観に恥じないくらい建物の中は広く、何故千川さんは迷わないのか不思議なくらいだった。本人曰く、「慣れれば迷わない」そうだ。嘘だろ何言ってるんだ……

そして、いつの間にか最後の部屋になっていた。体感5時間ぐらいかかった感じがするが、スマホの時計を見るとまだ2時間程だった。だいぶ巻きでやってくれたんだろう、有難い限りだ。

「ここが最後の部屋ですよ、ご自分で開けてくださいね」

「……………」

「ご自分で開けてください」のところに引つ掛かりがあったが、とりあえず開けてみる。すると、グラランドピアノが少し高いところにポツンとあり、その前にはパイプ椅子の軍勢が。そして、そこにはこのアイドルたちが座っていた。

そのアイドルたちは、俺が入ってきたことを確認すると口々に俺を品定めしてきた。

「あ、新しい人だー!」「……その、不健康そうね……」「でも、元氣そうだし良くない?」「みくにはどうでも……良くないのかにや?」「良くないでしょ、これから関わっていく人なんだよ?」「なーんでこんな所にいなきやならないのき、早く帰って寝たいんだけどー」「そんなこと言っちゃダメダメ☆ほら、元氣出すにい☆」などなど……ちよつと待て、自由過ぎないかここ!?

「……………それで、ここは?」

「はい、ここで貴方にはアイドルの皆に自己アピールをして頂きます」

「じ、自己アピール……!?!」

自己アピール……つまり、ピアノがあるのは……

「武内さんから『ピアノが得意』と聞いていたので、それをアピールしてもらおうと思ひまして」

「……………ですよねえ……………」

言わんこつちやない。第一、俺はピアノが好きなだけであつて得意とは言つてないんだがなあ……まあ、仕方ない。やれるだけやってみて拒否られたら拒否られたで考えよう。

「……………曲の指定は?」

「えっ?」

「曲。弾いて欲しい曲とか指定曲みたいなありません? 無ければ俺の卒業試験で弾いた曲引きますけど」

「卒業試験! じゃあそれでお願ひしますね」

「……………わかりました」

まるで死刑囚かのような動きで、段の上に登る。アイドルの方を見て一礼をして顔を上げると、みんなの目が俺に突き刺さつてきた。控えめに言つて卒業試験より緊張する。死にそう。

「やて……………」

椅子に座り、鍵盤に手をかける。深呼吸をして、息をひとつ吸い込む。そして、ピアノを弾き始める。

『ANiMA』。音楽ゲームの曲で、控えめに言つて人間が弾けるも

のじゃないと思っていたが、卒業試験ぐらいは頑張ろうと思って、気合を入れて弾いた曲だった。結局教授たちには理解されずに落第ギリギリだった。

静かな最初のパートから、連続和音地帯、そしてトリル地獄地帯へと移る。そして、一度止むと音程をひとつ上げてもう一度やり直す。そんな曲で、音楽ゲームでも一番難易度が高い曲だった。ゲーム用に作られた曲を人間が弾こうなんて言ってるんだからそりゃキツいだろう。とりあえず○i君反省して。

そんなことを考えながら必死に、そして楽しみながら弾いていたら終わっていた。顔を上げて、横を見るとアイドルの皆がポカンとして、こちらを見ていた。そりゃ理解されないよなあ……いきなり来てこんな曲弾きでしたら……

パチパチ……

どこからともなくそんな音が聞こえてきた。目を向ければ、肩まである黒い髪の毛、少しおっとりした目をした女の子が拍手をしてくれていた。……あれ？彼女、どつかで見たことないかな？見覚えがあるんだが……誰だっけ？

そして、その拍手から徐々に波は広がっていき、最後は皆大きな拍手を送ってくれた。さらには、アンコールをしてくれた子もいた。千川さんの方に顔を向けると、「b」としていた。なんだあの人。

とりあえず、アンコールがあつたなら弾かなければ失礼に値するので、もう一曲引くことにする。何を弾こうか……そうだ、あの歌を歌おう。

「千川さん、マイクありますか？」

「はい、ちよつと待ってくださいね……」

そう言うのと駆け寄ってきて、マイクをセットしてくれた。流石アシスタント、仕事が早い。

千川さんにお礼を言うと、また鍵盤に目を向ける。先程とは打って変わって柔らかい旋律を奏でながら、声を出してみた。

——遠い街ですれ違う 知らない顔に怯えて

——僕らは夢を見る 大切な誰かと



小指を結んで 離さないように

ゆびきりげんまん 唱えた

確か、この曲歌ったら肇は喜んでくれたっけ。今は何してるんだろ  
うなあ。おじいさんの跡を継いだのか、それとも高校に行つたのか  
な。そう思えば思うほど岡山のあそこへ、彼女の元へ戻りたいと思つ  
てしまう。一種のホームシックかもしれない。それにしても来るの  
が遅いなホームシック。

歌い終わってもその余韻は続いていたが、すぐに止んでしまった。  
さつきよりも大きな拍手を受けていると、千川さんが壇上に上がつて  
きた。

「はい、皆さん。この人か今日からここで働いてくれる、妹尾 畢さ  
んです。彼には武内プロデューサーのアシスタント、そしてプロ  
デューサーとして働いてもらいます！」

待て、アシスタントをやるとは聞いていたがプロデューサーをやる  
とは聞いていないぞ!? まずこんなFREEDOM DIVE←しそ  
うな集団を俺が抑えられる気がしない! だが、無慈悲な歓声が部屋の  
中に響き渡る。

「妹尾さん、いいですね?」

「アツハイ」

あの顔で凄まれたら無理だよお……やつぱり魔王には勝てなかつ  
たよ……

とりあえず、休憩してくれと言われたので椅子に座ってピアノを見  
ながら休憩してみる。わざわざ出してくれたのだろう、所々にホコリ  
が見える。ただ、調律はされていて定期的な手入れだけはされていた  
ようだった。そんなことを考えていると足音が聞こえた。そちらの  
方を向くと、さつき最初に拍手してくれた子がこつちを見ていた。

「何の用だい?」

「妹尾 畢さん、ですか?」

「さつき千川さんから挨拶があつた通り、俺は妹尾 畢だ。君は?」

「私は……」

そう言うと彼女はにこりと微笑んで――

「――私は、藤原 肇です。久しぶり、畢兄さん。」

声をかけてきた女の子は本当に幼馴染でした——

「私は、藤原肇です。久しぶり、おわり 畢兄さん」

目を疑ったし、大事にしていた耳も疑った。この子が、肇？あの、ピアノを聞いて楽しそうに、無邪気に笑っていたあの？……でも、今確かに俺のことを畢兄さんと呼んだよな？その呼び方はあの子しか知らないはずだが……

「本当に、肇なのか……？でも、なんでここに居るんだ？おじいさんはどうしたんだ？」

「おじいちゃんは、今も元気に轆轤回してるよ。ここにはおじいちゃん、そして私の意志で来たの。肇はいつも無難なものに逃げてしまいうから、ここでもっと鍛錬して来いって言われて」

おじいさんは一体何を考えているんだ。それにしても、まさか岡山から単身上京してくるとは思わなかった。電車賃と生活費でどれくらいかかると思ってるんだか。

「あ、そこらへんは大丈夫。おじいちゃんが全額持ってくれるって」「太っ腹ア！あとサラツツと心読むのやめない？」

そんな会話をして、そして二人して笑い合う。ああ、ここは岡山なのか。俺は、俺たちはもう、辿り着いてた……

そう考えていると、ドアが開いて千川さんが入ってきた。

「妹尾さーん……あれ？」

「……あ、千川さん。どうしたんです、仕事ですか？」

「そうですけど……なんでその二人はすぐに仲良くなってるんですか、手まで繋いで」

その言葉にハツとなつて手を見ると、手を繋いでいる、というよりも肇が俺の手を握っていた、と言う方がより正しいように思えた。肇も気づいたようで、すぐに手を話すと顔を赤らめて後ろを向いてしまった。クソ可愛いじゃねえか、就職して良かった。

「……それで、お仕事とは？」

「とりあえず、アイドルのみんなに挨拶して、顔を覚えてもらいましょう」

「……マジですか？あの人数を？」

「はいっ、まずはこれくらいやってもらわないとプロデューサーにはなれませんよ？」

「鬼！悪魔！ちひろ！まず俺はプロデューサーになりたいなんて言つた覚えは無いですう！」

そう叫ぶと彼女はいつものあの笑顔で立ち去って行つた。その後ろで部屋に残っているのは、これから来る地獄を思い浮かべ絶望する俺と、未だに顔を赤らめて何かを呟いている肇だけだった。

「本当に、出来るのか？俺は……」

今まで、何度もやるべき事を投げてきた俺だ。本当に出来るのかという心配は心の中に確かにあった。だが、乗りかかった船だ。ここでやらんでどうするんだ、おじいさんに見られたら絶対に叱られてしまふ！

なんだかんだで、覚悟を決めてドアを開けた。するとそこには――

「だからさー、プロデューサーにゲームの才能あるのかって聞いているの」

「は、はあ……」

さつきまで説明してくれていた武内氏が『働きたくないでござる』と書かれたブカブカのTシャツを着たロリに怒られていた。何を言っているかわからないと思うが俺もわからない。

「あの一、武内さん？これ何がどうなってるんです？」

「お、丁度いいところに来たな新人君！君も私とスマブ〇の対戦をしようじゃないか！」

「……いや、良いけど……なんですかココ、みんなこんなフリーダム何ですか？」

「まあ、4割ぐらいは……」

それ半分ぐらいじゃないですかヤダー。ロリっ子、杏というらしい

が、彼女に指図されながらも座布団の上に座ってコントローラーを持つ。

「何使ってもOK?」

「OK牧場」

ネタが古すぎるんだよなあ……

「おい杏う！ベヨネットを使うのはなしだつて！」

「はっはっはー！勝てばよかろうなのだー！」

「うるせえクラウド使うぞ」

「すいませんごめんなさいお願いですからリミット技はご勘弁を」

はっはっはっ、さつきクラウドで3タテ決めたのが素晴らしかったなあ！年甲斐もなく杏ちゃんを虐めていると、後からポンポンと背中を叩かれた。誰かと思えば魔王スマイルを決めた千川さんだった。

「待って!?これは彼女との交流だから！セーフなんです！」

「へえ……」

あかん、これ完全にスイッチ入ってるう！

「まあ、いいですけど。とりあえず他の子も帰ってきたんで挨拶お願いしますね」

そう言うと、彼女は部屋を出て行ってしまった。怒られると思ったんだが……

それと入れ替わるように昨日も見たアイドルの皆が帰ってきた。やっぱり数が多い。部屋の温度が3度くらい上がってそうだ。

「じゃあ、改めて……妹尾 畢おわりだ。大学ではピアノを専攻していた……まあ、腕前はさつき聞いた通り平凡からそれ以下だ。あとは……適当に話が合わせられるくらいの浅く広いオタク知識ぐらいだな。よろしく頼む」

ハイ！と元気のいい返事が返ってきて、その後は質問タイムとなった。

「初めまして！島村卯月って言います！あの、畢さんの好きな食べ物はなんですか？」

「初めまして。うーんとね……お米。故郷……岡山なんですけど、家の

すぐ近くの人が米農家やってて、よくお裾分けで貰ってたんだけど、それが美味しくてそれ以来お米が大好きになったんだ」

あのおじさんはすごい優しかったなあ……そう思っていると、島村さんはポニーテールを揺らしながら、お辞儀をすると椅子に座った。礼儀正しくていい子なあ……

「次は私ね。初めまして、速水奏よ。突然だけど、貴方には好きな子はいるかしら？」

何というか……色気の塊というか、ただただエロい人、速水さんに質問されたことは割と心にアイスピック刺された感じだ。つてかアイスピック刺されたら致命傷じゃね？

「そうだなあ……居ないわけではないけど、ノーコメントで」

居ないとは言わない。気になっていには気になっているが、好きかどうかはわからないから。今はまだ、ただの友達でありたいから……今はまだ。

「ふひっ……はじめまして……私、星輝子。貴方、さつき肇ちゃん……仲良く話してた……どんな、関係なの？」

速水さんが座ると次矢矧に質問が来た。輝子ちゃん、というらしい。少しダウンナーな子なんだろうか、言葉も少し継ぎ接ぎのように感じた。

「ああ、肇のことか？彼女とは幼馴染でね、ほとんどずっと一緒にいたよ。住んでるところも向かいの家だったからね」

そう答えると輝子ちゃんは面白がるかのように少し笑って座った。それ以降はあまり質問は来なかった。あと、肇がすこし不満そうにこちらを見ていた。何故だ。

---

事務仕事もひと段落した時、事件は起きた。

「そう言えば、藤原さんと妹尾さんは幼馴染だったんですね」

「ああ、そうだよ。ただ……俺が高校に行く頃に俺が東京に行くから別れちゃったけどね」

武内氏の意向で話す時はタメ口で話すようにしている。本人曰く、こういうのに憧れていたそうで、俺が快諾した時には少し笑って

た。正直その笑顔が怖かった。

「ピアノも、その時に？」

「うん、岡山の田舎だからやるのがなくてn「キヤー!?!」…あ?」

「おや?」

武内氏とそんな話をしていたら部屋の外から悲鳴が聞こえた。何かと思いい外を見ると、肇が胸元を押さえてへたり込んでいた。

「え、どうしたのさ」

「あ、あの子に……お、お……おっばい揉まれたあ……お嫁に行けないよお……」

視線を向ければ、そこには手をワキワキさせる棟方 愛海という口リっ子アイドルの姿が……マジでか、やっちゃったのか。天才かよ。顔を真っ赤にしてる肇とかレアやぞ、マジでありがとう。

そうは言っても、何とかして止めなきゃいけないので、棟方ちゃんを追いかける。だが、なかなかにすばしっこいので捕まえられない。そう思っていた時だった。

「新人君は新陳代謝が高い……なんて……ふふっ」

目の前に、ダジャレを言う高垣 楓さんの姿が――

「メロンはっけーん!!!」

そして、我々の目の前でいつの間にか楓さんは胸を揉まれ、しかもわざとらしく嬌声を上げ、それに対し、その揉んでいる棟方さんを探らえるという中々にシユールな光景が広がるのであった……この先が思いやられるなあ……

ちなみに、途中で棟方さんの胸を揉む標的は楓さんから武内氏に変わっていた。そっちも行けるのか（困惑）

運営さん、水着の肇の実装はまだですか――

時は6月。ジメジメした梅雨は例年よりかなり早く明け、早くも真夏の雰囲気醸し出してきた頃、俺も仕事になれてきた。まあ、2ヶ月やつてるからね。ま、多少はね？

「そうですね……妹尾さん、プロデューサーアシスタントとして一つ仕事を頼んでもよろしいでしょうか？」

「おや？と思つて武内氏を見ると出会つた頃より幾分やつれた顔でこちらを見ていた。俺が友人だからつてそんな所を真似しなくてもええんやで。」

「私はこれからCGの皆さんを連れて遠くの方に仕事に行かなければなりませんから、その間に入つてこの仕事をお願いしたいのです」

そう言うと、彼は俺にファイルを渡してきた。どれどれ……

『ファッション雑誌の撮影 水着バージョン』……水着!?誰が出てるんだろ……鷺沢 文香、新田 美波、塩見 周子……藤原 肇。……

肇!?

「受けていただけますか……?」

「もちのろん、ふたつ返事で受けさせていただきます!サンキュータツケ!」

「タツケ!?いや、別にそれでも構わないですけど……」

いや、それで構わんのか……それとも、そこまで精神が疲弊してしまつたのかな……お劳しや……

「よく良く考えるとすげえ面子だな、こいつら」

俺に宛てがわれたほぼすし詰め部屋の隅つこの椅子に精一杯背中を寄りかけながら座つて、渡されたファイルを見ていた。現役大学生二人に、京都老舗和菓子店の跡取り娘……この子は元か。そして、備前焼職人の孫。やつぱりキャラ濃いわここ。

しかしながら、水着撮影である。水着……あれ?肇も含め、女性の水着を着ているところを見るのは何気に初めてじゃないのか?まず、小学校の頃は女子を女性として見てなかったし、中学のプールは全部



サボったし、高校と音大にはプールの授業なかったし。プライベートでプールに行くこともないから……やべえ、想像しただけで俺が大変なことになることが目に見えてくる。拙いな、(出血多量で俺が)死んでまう。

なんか、そんなことを考えていたらスマホから電話の着信音が鳴った。画面を見ると、国外からの電話番号……国外!? 電話代嵩むからやめて!?

そんなことを思いながら電話をとる。

「もしもし、誰だ?」

『俺だよ! 覚えてねえのか!』

「いや、俺って言われてもわからんわ!」

『ほら! お前の大親友!』

「……OK、分かった。じゃあ何故国外から電話した」

『ああ、その話ね。今俺ウィーンに居るんだわ』

は? ウィーンってあの? オーストリアの首都のウィーン? 可笑しくないか? あいつ就職するとか言ってなかったかなあ?

「なんでそっち居るんだ?」

『ああ、もう一度学び直してみようと思っただけ。学長に言ったら紹介状書いてくれたよ。いやー、試験が少いで終わったのは助かったなあ』

「お前それ裏口入学じゃねえかよ!」

電話口から朗らかな笑い声が聞こえてくる。こいつはヴァイオリンの天才で、プロになることを夢見られていた。故にウィーンの音大に行く事にしたのだろう。数年後が楽しみだ。

『そういや、<sup>おわり</sup> 畢は何処に就職したんだ?』

「ああ、それなら346プロダクションが拾ってくれたよ。アイドル部門に連れてかれて、何やかんやでプロデューサーのアシスタントになった」

『すげえじゃねえかよ! 346って言ったら今やアイドル界の一角を担ってる会社じゃねえか!』

「だろ?」

そして、こいつは他人をやんやんやと持ち上げるのが得意だ。大  
学でもその性格でピリピリしがちなオーケストラの空気を和ませて  
いた。そんなことを考えていたら、電話口の後ろから流暢な英語ア  
ウンスが聞こえてきた。

『おっと、電車の発車時刻だな。じゃあな！夏には戻ってくるから  
いっぱい飲みに行こうぜ！』

「いっぱいは勘弁な」

プツリと電話が切れる。ああ、心が少しポカポカした。

「あれー？プロデューサーは？」

「あの人は今日は地方遠征中だ、武内くんじゃなくて悪いな」

「別に大丈夫だけどさあ……つてか、武内くんって呼ぶようになった  
んだ？」

周子さんが不思議そうに聞いてくる。だが、答えようと思った瞬間  
に「ああ！とうとう彼と一線越えたのね！やるう！」と車全体に聞こ  
えるくらい大きな声で自己納得しやがった。おい後ろ見てみるみん  
な引いて……待てや、なんで全員顔を赤くしてんだよ可笑しいだろお  
い!?

鷺沢さんは多分本で読んでたんだろうし、新田さんも歳が歳だから  
関わることもあるだろう。だが肇はなぜ顔を赤らめるんだ。おじい  
さんが泣いてるぞ。

「はいはい、そんな馬鹿な事言っただけ。ここが撮影場所だぞ」

見覚えがあると思ったら……プールでの撮影だったのだが、よりに  
も寄ってあの『例のプール』だった。確かに皆胸でかいし大人の色気  
のようなものがあるが……まあ、わからなさそうだしいいや。

あと、なぜ俺は水着を要求されたんだ？俺も撮るつもりなのか？

「せのちゃん、みんな着替えてきたよー！」

周子さんのその声を聞いて、寝ていた体を起こしてそちらを見る。  
すると、そこは桃源郷であった。

周子さんと鷺沢さんはパレオ付きのビキニ。鷺沢さんは周子さん

に比べて青が濃いのかな。多分、藍色って言った方がいいと思うが何というか、色気がすごい。一方の周子さんも淡い水色で、髪の毛の色も合わさって儂げな印象を受ける。ただ、口を開けばお騒ぎ大好きな女の子なんだが。

新田さんは水色の競泳水着。彼女らしい、スポーティーな印象を受ける。あと、競泳水着特有のピチピチ感のせいで出るところが出ててすごく……エロいです……

そして、大本命の肇は……

「大丈夫かな……似合ってるのかな……」

「大丈夫ですよ……えいつ」

あ、鷺沢さんが肇が羽織っていたタオルを剥がした。肇が着ていたのは、ピンクとボルドーのツートンカラーのセパレートだった。うん、なんか……もう、見たただけでお腹いっぱいですありがとうございます……

「……お、おう。似合ってるんじゃないかな……？」

思わず顔を背けたくなる。それは、気まずいからなのかそれとも、ただただ直視できないくらい恥ずかしくなっているのか。そうしている、前から小さな声で「ありがと……」と言われた。それで更に意識してしまう。肇はどんな顔をしていたんだろうか。

「おーい、甘い雰囲気のところ申し訳ねえが早く始めてえんだがー？」

撮影は順調に進んだ。時折楽しそうな声と、水の音が聞こえてくる。チラリと見ればプールの中でビニールのバレーボールを打ち上げている。

(あー……混ざりてえ……)

男の性……という訳では無いが、単純に楽しそうだからだ。ああ……若いつていいなあ……

「あ、プロデューサーくん。君も水着に着替えてきてくれたまえ」

「……は？なぜです？」

「そろそろ撮影が終わるし、我々も撤退する。だから、17時まで君たちが自由に使えるということらしい。せっかくの機会なんだから、ア

アイドル達とプールで遊んでこい。さつきもあの白い髪の子が『せのちゃん早く来ないかな』と言っていたぞ」

カメラマンさんの良いのか悪いのかよく分からない御配慮によってプールが貸切で使えることになった。例のプールだからちよつとアレな感じはあるけど、まあ普通のプールって思えばいいや。

「買ってきて良かった、これ以外だと買わされた競泳水着しかないからなあ……」

俺が持ってきたのは、半ズボン型の水着で膝丈の長さのやつ。小学校の頃も着ていたような、そんな安心感がある。競泳水着なんて履いてきた日にはなんて思われるか溜まったものじゃない。

素早く着替えて、シャワーを少しだけ浴びる。このシャワーの意味が俺は未だによくわからん。何？身体を冷やさないためなのか？

水のカーテンを通り抜けて、先へ向かうとさつき見ていた例のプールに辿り着く。俺が辿り着いたのを確認すると、みんながこちらを向いてきて、そして何故か俺のことを凝視する。主に上半身……と信じたい。間違っても下半身じゃないことを信じたい。

「畢兄さん、結構あるんだね……」

「そうね、ちよつと見くびってたわ……」

「なんと言うか……すごいなあ……」

「せのちゃん、すごいね……」

やばい待って怖い怖い、主語がないからどこ見てるのかわからないし、ここだけ切り取ったらかなり危ないよこれえ!?

「……な、何の話だ？」

「その……お腹の……」

「……腹筋？」

『そうそれ！』

語彙力低下しすぎて腹筋すら出なくなったか、お勞しや……指摘された通り、俺の腹には見事なシックスパックが……半分ぐらい埋もれていた。ストレスで不摂生な生活を続けていたのもあったし、筋トレも最近していない。大学でテニス部（サークルではない）に入って割

とガチで部活動していたので、体力面とかは自信ある。ただ、器用じゃないし速く走るの苦手だからひたすらベースラインの打ち合いだったけど。

「とりあえず、まあ、その、運動しとけ？」

「自慢!?!」

「いや、違うから。自慢じゃないから。あとお邪魔するぞ」

適当に新田さんを迎いながら、少し離れたところに入水する。やはり、なのかは分からないがプールは温水が張ってあって、そこまで冷たくもないが、風呂ほどあつたかくない丁度いい温度に保たれているのがわかった。カメラマンまじ有能。

「妹尾さん……なんでもっとこっち来ないんですか？」

「そうだよ、別に何も引くことないじゃない」

鷺沢さんと周子さんの美女二人組に押されてはどうしようもないので近づいてみる。すると、目の前に真赤なビニールが飛んできた。避けられるはずもなくそのまま水の中へ轟沈。すぐに浮上して、無理やり息を吸う。

「ちつくしよ……何しやがんだ!」

「畢兄さん、あーそーびーまーしょー」

「うるせえ! なんぼ何でも危険じやろう!?!」

「ええじやねえ! 早う一緒に遊びたかったんじやもん!」

「なんじや!」

「ふん!」

「そう言えば、妹尾さんって岡山出身だっけ」

「だよねー、だからあの方言が出るのか」

「でも……少し微笑ましいですね……ふふっ」

その後、バレーボールや自由水泳なんかをして、目いっぱい楽しんだ後、帰りの時間となったので、先に着替えて車内の中でエンジンをかけて待っておく。待ってる間が暇なので、カーナビのテレビを開いた。

『……続いているニュースです。本日、日本時間の14:00ごろにオーストリアのウィーン郊外で列車立てこもり事件がありました。詳細は未だわかっていませんが、邦人一人が巻き込まれているようです。現場の〇〇さん?』

……は?マジで?嘘だろ?そう思いながら急いで携帯を開いて、親友に電話する。頼む……出てくれ……

『あー、もしもし?どしたのいきなり。』

祈りが通じたのか、彼はちゃんと出てくれた。

本人曰く、「子供を宥めるためにヴァイオリンで曲を弾いたら立てこもり犯が感動して自首した」らしい。そんなアニメみたいな展開があつて貯まるか。

そんなこんなで全然納得出来ないまま、電話を切ると、丁度肇たちが戻ってきたところだった。

「ふー!楽しかったねえ!」

「久しぶりに泳いだなあ……」

「プール……たまに体を動かすのも、悪くない……かも?」

「畢兄さん、楽しかった?」

「俺か?ああ、最高に楽しかったよ」

「そう?なら、良かった!」

そんなちよつとした会話をした後、後に車を発進させた。少し経って、交差点で信号待ちしていると、ふと後ろの座席の声が無くなっているのに気づいた。後部座席を見ると、2列目には鷺沢さんと新田さんが、3列目には周子さんと肇が、それぞれ肩を寄せ合いながら眠っていた。久しぶりの運動に疲れたんだろう、みんなとても幸せそうな顔をしていた。

後で、武内氏には連絡を入れておいて、千川さんと武内氏と俺、あと手が空いてるアイドル達で仮眠室に運んであげようかな。

## 人生の先輩の言葉はやはり重い

なぜ、俺は今。

なぜ俺は、居酒屋で。

なぜ右側に楓さん、左側に片桐さん、後ろ側に川島さんの編成で抱き抱えられるという修羅場状態のど真ん中にいるのだろう。

「飲み会？」

「ええ、親睦を深めるために、一つ」

元はと言えば、この誘いがやばかったのではないだろうか。それをホイホイ受けた俺も俺だが。いやあ、でも、アイドルから飲み会のお誘い受けたら断れないよねえ？

約束の時間になり、俺は346からちよつと離れたの飲み屋に向かった。店の前で楓さんと川島さんが待っていて、俺と会った瞬間に楓さんが「夕食が肇ちゃんと食べられなくてYou shock?」と聞いてきて、空気が凍りついたのは言うまでもない。確かに肇と食べられなかったのはショックだが。

店に入ると、慣れ親しんだ安い居酒屋……よりは少し上等な酒の香りが漂ってくる店だった。少し上等な酒も置いてあるのだろう。

楓さんが取ってくれていたらしい、個室に入る。大体3畳無いくらいの少し広めの部屋だった。……待て、なんでこんなに広いんだ、嫌な予感しかないぞ。

ちなみに、2人は店に入ると同時に「生！」と頼んでいた。俺はハイボールを注文。大学入って20になった時に初めて飲んだ酒がトリ○ハイボールで、それ以来ハイボールにハマってしまった。おのれサン○リー！

『かんぱーい！』

掛け声と共にゴクリと一口。あゝ生き返るわゝゝ。これだよコレ、仕事終わりの1杯は体に染みる。もうこれが俺の血液でいいや。体はトリスで出来ている。

「ああ……これよねえ」

「いいですねえ……」

「……でだ、なんで俺が連れてこられてるんです、これ？」

「あー……色々聞きたいことがありますね……」

ふむ。俺より年u……人生経験が豊富な二人が一体何を俺に聞くつもりなのだろうか。

「肇ちゃんの事なんですけど」

「あの子に過去を聞いてもはぐらかされちゃうのよね……ねえ、確か妹尾くんって彼女の近所だったんでしょ？何か面白い話はなかったの？」

「うーん……」

なるほど。確かにあいつは余り過去を話したからないからなあ……話しても大丈夫そうな話題は……

「ああ。あの子、名前が『肇』で結構男の子っぽいじゃないですか」

「まあ、そうですね……」

「だから子供の時……小学生くらいですけど、その時は男の子と混じって遊んでましたよ。山の中に秘密基地作ったり、泥遊びしたりとか」

「え、そうなの？あの子かなりアクティブなんだ……」

確かに陶芸の話ばかりするからあの子はインドア系に見られるかもしれない。だが、元々運動神経はピカイチだったのだ。持久走で俺はあいつに勝てたことがない。球技は余裕の勝利だけど。

「それで？これだけのために呼び出した訳じゃないでしょう？」

そう言いながらハイボールをゴクリと飲む。すると楓さんは散歩するかの容量で地雷を踏み抜いてきた。

「妹尾さん、貴方……肇ちゃんのこと好きですか？」

「ブッフアッ!？」

やっべえ、噴いたからテーブルの上びしょびしょになっちゃったじゃないか……スーツにかからないだけマシだけど。ところで……え？異性として意識しているか？……そりゃ勿論、あんな可愛くなつてたら意識しますって。小学生の頃はあの子ショートカットだったんだぞ……



「異性としては意識してますけど、好きかどうかと言われると……どうなんでしようかね、わからないです」

苦笑いして武内氏のように首筋を搔くと、楓さんと川島さんは揃いも揃ってクソでかい溜息をついた。

「これは、ダメですね……」

「そうね、鈍感とかいうレベルを遥かに超えているわ」

いや、どうすりやお前ら満足するねん……そう思っていると、ドアが開いて新しく人が入ってきた。

「いよーっす！あれ？妹尾くんもいるの？」

「あ、片桐さん。こんばんは」

この人は、片桐 早苗さん。警察をやめてアイドルになったという異質……いや、346だとこれ普通に入るわ。なお、警察官としてはかなりイレギュラーな模様。

「でー？今なんの話してたのさ？」

『妹尾くんが鈍感だつて話』

「あー、成程ねー」

「失敬な。鈍感なわけがないでしょう」

『嘘を言うなっ！』

銀○万丈ボイスが聴こえそうだし、猜疑に歪んだ黒い瞳がせせら笑いそう……そして何より、むせそう（小並感）

とまあ、なんだかんだ言いつつも酒は進み、今に至るといわけだ。勿論俺以外みんな酔ってる。まあ、俺は途中からジンジャーエールにシフトしたからなあ……

「だからあ……アンチエイジングが効いてない気がするのおく……」

「なくにが、『叔母さん』だよブ○○すぞあのクソガキ……」

「すう……布団が吹っ飛んだ……ふふっ……」

とりあえず電話して、武内氏呼んで回収しようかな……

武内氏が、今西部長を連れてきて車の中に回収、事務所（の仮眠室）に投下して戻ってくると、店員さんが苦笑いして待っていた。ごめんなさい。

「部屋は、使えるかな？」

「あ、さっきの部屋でいいのなら……」

「ああ、そこで構わんよ。久しぶりに事務所の男性職員で交流を深めるとうとうじゃないか」

今西部長は人懐っこい笑みを浮かべてこちらを見てくる。それを受けて武内氏はちよつと困ったように首筋を掻いていた。

さっきの惨事があったところにもう一度戻る。今見ると大惨事である、なんで一升瓶が5本転がってんねん。

「さて……はじめましてだね、妹尾 おわり 畢くん。僕は、一応部長……つてことでいいのかな？今西つて言うんだ、よろしく」

「はい。お話は耳に入ってきております、よろしくお願いします」

「そんなに固くならなくてもいいいき、今日は無礼講だ」

無礼講だ、とは言われたが彼から出てくる独特の雰囲気というかオーラというか、そういうものに圧倒されて無礼講なんて出来そうにない。しかも、例の346アイドル部門閉鎖事件で一番活躍したのも彼だと聞く。相当なやり手なのだろうが、温厚な顔つきからは想像もできない。

「タバコは構わないかね？……あ、僕にはウオツカのストレートを」

「はい、大丈夫です……ウーロン茶で」

「オレも大丈夫です。あ、俺はまだあるんで大丈夫です」

それにしても、部長はウオツカを飲むのか。酒にも強いとかなんじやこの人は……

「では、シンデレラプロジェクトが軌道に乗ったこと、そして何より妹尾くんの入社を祝つて。乾杯！」

『乾杯！』

「うーむ……妹尾くん。何か、言いづらそうなことがありそうだね？何かあれば言ってみなさい」

「……………」

言つていいことなんだろうか。さつき楓さん達に言われたことが胸に引っかかりすぎて顔を顰めていたところをどうやら部長は見逃

さなかつたらしい……とりあえず、相談だけしてみようか。

「あの……アイドルとプロデューサーの恋愛って、どうなんでしょうか……」

「……………」

今西部長はさつきからの笑顔を変えることなくタバコを一服すると、煙を吐きながらこう呟いた。

「世間一般、それとそのアイドルのファンは恋愛を認めないかもしれないね。そりゃアイドルは皆の『idol』でなくてはならないからさ。」

「はい……………」

やっぱりダメだよなあ……そりゃそうだ。

「だが……僕は構わないと思ってる。寧ろどんどんやっていってほしい」

「……………は？」

「訳がわからない、という顔だね。ただ、考えてほしい。アイドルは皆の『idol』で無くてはならないと言ったが、346のアイドル……勿論346に限った事ではないが、彼女たちはアイドル以前に人間なのだよ。だから、人を嫌うことだってするし、誰か一人を愛することだってする。誰かの気持ちを受け止めて、その人に尽くすようになるかもしれない。僕は、それでいいと思うんだ」

……とても意外だった。彼の事だし、認めないかと思っていたが……しかも、更にその言葉は別の方向からも飛んできた。

「……妹尾さん。私も、構わないと思っています。アイドルには休息も必要です。その休息を支えてあげられるのはプロデューサーの仕事ではありませんが、『プロデューサー』という立場からではキツイものもあるかもしれません。それ故に『それを何とかしてあげたい』『彼女と共にいたい』と心から思うのならアリだと思います」

「武内……………」

武内氏は、たしかアイドルを何人が辞めさせてしまった経歴があったはずだ。故に、思い悩むところも大きいのだろう。二人の言葉が、ずしりと背中に載って重さを増していく。だが、その重さは気持ち悪

いものではなく、義務感。つまりは背負わなくてはならないものを再認識した感じであった。

「まあ、第一に言わなきゃ損だよ。言って後悔するよりも言わないで後悔するほうが辛いよ、うん。そして、言えるかどうかが君の度胸、ということになるんじゃないかな?」

「え……ちよ、ちよつと待つてください!なんで俺の話になってるんですか!」

俺今そんなこと一っ言も言つとらんぞ!?!なんでだ!?

そうやって焦る俺を尻目に彼はタバコを吸って一言。

「だって、普通はプロデューサーからそんな言葉出ないからね。基本、『仕事つらい』か『次の仕事の話』になるから、そんな話が出たら基本的に話し手本人の話をしているんだらうって容易に想像出来るだらう?」

「ぐっ……」

正にぐうの音も出ないというのはこういうことだろう。何だこの人、推理力高すぎねえ?杉下右○か、古畑任○郎か?

「さあ、話してみたまえ。何、これを外に言うつもりはないよ。僕は口が堅い男だし、約束は守るよ」

「……私も、気になります」

彼ら二人の眼差しは断れないし、武内氏の目線が怖い。いや、彼自身は純粋な好奇心から聞いているのだろうが、目付きが三白眼なので明らかに睨んでいるようにしか見えない。

「……わかりましたよ、お話します」

彼ら二人に洗いざらいを話した。肇と幼馴染であること、高校に入る時に別れたこと、ここに入って肇と再開し彼女の変化に驚いたこと、そして、彼女のことをどう思っているのかを考えると頭の中が何も考えられないくらいにこんがらがること。

彼等は、今西部長は真剣にこちらを見つめて、タバコに火をつけた。「ふーむ……恋愛感情……」と言っているのかはわからないけど、とりあえず言えることは、君の中には多分彼女に伝えたい何らかの感情が

あるはずだよ。とりあえず、ゆっくりでいいからその気持ちを整理して、ケジメをつけるべきなんじゃないかな。告白にせよ、別れるにせよ、さ」

「そうですね……わざわざありがとうございます」

「人生の先輩からのアドバイスだよ……僕ももつと若かったらなあ……」

「ふふっ……」

「あ、武内くん今笑ったなあ？よし、給料減らすからね」

「やめてください」

それで俺も含めて三人揃って笑う。ああ……相談して、そしてこの職場につけて、本当に良かった。

## 新社会人特有のアレと決意

飲み会から二週間が経った。あれから何度も仕事しながら気持ちを考えてはいるけれど、中々思いがまとまらない。仕事をしながらが悪いのだろうか。

今日は残業だなあ……と思いつながら、アイドルの面倒を見て自分の部屋に戻って仕事を再開する。千川印のスタドリを飲み、トイレに行こうとしたその時だった。

「アレ……？」

視界が安定しない。拙い、これは倒れる前兆だ。何とかしてドアの所まで辿り着くと、倒れ込みながらドアを開けそのまま床と衝突する。

「誰も……居ねえか……あ」

そのまま、俺の意識は暗転した。

目覚めた時は、ベッドの上だった。誰かがきつと運んでくれたのだろう、後でお礼を言いに行かねば。

「あら、起きたんですか」

声のした方向を見るとナース姿の女の人があった。確か……柳 清良さんだったか。確か、元看護師の人だったはずだ。……元多いなここ。

「あ、態々ありがとうございます……」

「いいんですよ、今日はオフでやることもなかったのです」

態々オフなのに来たのか、本当に頭が上がらないな。それで……倒れた原因は何だったんだろうか。

「過労です。スタドリエネドリで騙し騙しに仕事してましたね？」

「……はい」

確かに、エネドリとかで騙し騙しに仕事し続けてきた。新社会人になって、仕事へのスタミナもあまり足りないのにこんな無理な生活を続けていたことが悪いのだろう。

「二応、生食（生理食塩水）を点滴しておいたので今日一日は動かない

こと。あと今後一週間は無理な仕事はしない。スタドリエネドリも同じ。いいですね?」

「はい……態々ありがとうございます」

そう言うと、彼女はニコリと微笑んで出ていった。携帯は……あるが、辞めとこう。体を休めること最優先だし……寝よう。

ダメだ、寝れない。

人間というものは不思議なもので、疲れが溜まりすぎると逆に寝れなくなってしまうのだ。そして、一度寝てしまうと死んだように眠りこけるので、無理というものは百害あって一利なしなのだ……まさしく俺だな。

「すみませーん……気分悪くなっちゃったので、少し寝かせてください……」

「はーい。注射します?」

「いや……結構です……」

……誰かが隣のベッドで寝始めたようだが、意識が少し朦朧としているせいか、誰の声かは分からない。片方が清良さんだということ分かるんだが……

「……誰だ?」

「ひっ……あ、わ……私……藤原、肇だよ……?」

「……そうか……驚かせてすまねえな……」

「ううん……いいの、大丈夫だから……」

肇……か。正直、朦朧としているせいで、誰の声かが正確にわからないから誰かがなりきっていたら多分信じきってしまうだろう……まあ、この事務所にはそんな子はいないと思うが。

「練習、し過ぎたのか?」

「うん……激しいステップとか、難しく……」

そう言うと彼女はふふつ、と笑う。その声が少し夢げで、触れたら消えてしまいそうだった。声に触れることは出来ないが。

「そうか……ゆっくり休めよ。無理は禁物……って俺が言うことじゃないか」

「そうだよ、 畢兄さんこそ無理は禁物じゃない……部屋から30本以上もスタドリが見つかったって、 早苗さんから聞いたよ?」

……マジか、そんなに飲んでたのか。俺は気づかなかったぞ、流石にやべえんじやねえかあれ。

「……面目ねえや」

「気にすることないよ。いつもお仕事頑張ってたの、私は良く知ってるから……」

「……そっか」

見てくれている人は、ちゃんと見てくれている。それが嬉しくて、擦ったくて、よくわからない気持ちになって涙と嗚咽が零れる。

「ど……どうしたの……!?!」

「何でもない……何でもねえんだ……」

彼女は「そっか」と言うと言を閉じてゆつくりと寝てしまった……多分。カーテン越しだからわからないが、きっとそうなんだろう。

そして、この気持ちもきつと……

過労から回復して数週間して、七月になり社内も冷房を本格導入し始めた。武内氏と千川さんには相談して、仕事の数を少し減らしてもらった。とは言っても、あまり量は変わったように思えないし、アイドルの面倒を見るのも大変なので、疲労感は変わらないが。

現に……

「あゝあゝあゝあゝ、 キャッツがまた負けたあああああ!!!」

「ファツキユーガツツ」

「ゆ、友紀さん!そういう時こそ笑顔ですよ!いえーい、ピースピース!」

「笑っていられるかあああああ!!!」

「ひえええええええ!!!」

片方ではキャッツがサーベルタイガースに負けておこ気味の姫川友紀(ユツキ)ちゃんを宥めようとして、卯月ちゃんが得意の『エヘ顔ダブルピース』をキメたらユツキがキレてるし……

「だから、お菓子は和菓子が最強なんだって!生で食べられるし、焼い



ても蒸しても食べられるんだよ!？」

「周子さんは分かかってないの!しつとり感とパリパリ感が両立できるケーキこそ最強なの!パリパリの乗ったチョコケーキを食べたことあるの!？」

「このわからず屋!」

「やるつもり?ケーキ地獄を見せてあげる!」

もう片方では周子さんとかな子ちゃんがお菓子最強対決をして一触即発の状態……いや、アレはもう開戦してるのかこれ。とにかく、今のプロジェクトルームは地獄だった。こんな時、武内氏と今西部長ならどうしたんだろうか……そして、その矛先は必ずと言っていいほど……

『ねえ、プロデューサー!聞いて聞いて!!』

と俺に向けられるのだ。あと、こんな時だけ俺のことをプロデューサーと呼んでくる。いや、確かにアシスタント期間は過ぎてるとは思うんだが……

とりあえず、ユツキには「キャッツまだ一位だろ、チャンスあるって」と。怒られて泣き顔になってる卯月ちゃんには「大丈夫大丈夫、いえーい」と恥を忍んで頑張つてエへ顔ダブルピース。ケンカしてる二人には「お前ら一番は家で簡単に作れるホットケーキだろJK」と新たな火種を投入して、標的を俺一人にし、最終的に仲良くなつてもらう。

……悪い、やっぱ辛えわ…… (ノクティス並感)

「はーい、皆さーん。お仕事の時間ですよー」

こ、この声は……!まさか……!

「まさかお巫山戯してる子達はいないですよねー?」

そこには、緑千の服川を着た天使さんが居た。サンキューチツヒ、仏!天使!ちひろ! (テノヒラクルー)

「あんまり妹尾さんをいじめちゃダメですよ?妹尾さんにはまた別の仕事があるんですからね?」

鬼!悪魔!魔王!ちひろ! (手のひらドリル)

「どっち何ですか貴女は!」

「さあ、どうでしょうねえ？」

彼女は意味深な笑みを浮かべた。やはりこの人は苦手だ……この人が作るドリンクも含めて。

346プロダクションには、社内カフェというものがある。そこでウサミン星から来た安部菜々さんじゅうななさいが働いているのだが、それはまた別の話。

夕食を、武内氏と共に食べていた時に彼がチラシを一枚渡してきた。

「ん？何だこれ？夏祭り？」

「ええ……貴方には入社一年目とは思えない程働いてもらいましたから、少しは休んでください。折角この時期ですし、少し郊外の神社で夏祭りをやるらしいので、是非行つてきてはどうでしょうか……？勿論、アイドルを誘つて行くのもいいんじゃないでしょうか。無論、予定が空いていければの話ですがね」

つまり、彼はこう言いたいのだろう。『肇を連れて行け、そしてお前の気持ちを伝えて来い』と。

その意図が本当かどうかわからないままに、俺はオムライスを食べる。口の中に広がるケチャップとグリーンピース多めの懐かしい味と少し塩味のある卵の味が広がって、仕事明けの体に染み込んでくる。仕事明けはやはり少し塩っぱいくらいが丁度いいのだ。

対する武内氏はカレー。それも見た目に寄らず、甘口である。前にウサミンに聞いたところ使っているカレーのルーはバーモ○ドラしいので、辛口でもかなり甘いはずなのだが、その甘口とはどれだけ甘いのだろう。オイオイオイ死ぬわアイツ。

無言、とは程遠いくらいに色んな話をして、俺たちの夕食の時間は過ぎていく。

仕事も終わり、帰るかと思いい荷物に纏める。すし詰め部屋を出て、少し暗くなった廊下に出るとスタジオの方から明かりが漏れているのに気づいた。何かやっている奴が居るのかと思ってそちらの方に

向かうと、そこには――

「いいぞ！良くなってきたじゃないか！」

「は……はい！ありがとうございます……ごぎいます！でも、もう一回……！」

練習をする肇の姿があった。前に苦手と言っていた激しいダンスなのか、運動神経がいいはずの彼女でさえ息が上がっている。ドアについた窓から見ている俺は見向きもせず、ただ鏡とトレーナーに向けてダンスを披露しているのだ。

「……………よし！」

彼女も進化しているのだ。年上の俺が進化しないでどうするんだ……そして、俺は携帯を開いて画面をフリックし始めた。

無題

ベッドで寝ていた時に苦手だと言っていた激しいダンスが出来るようになっていて俺は嬉しいよ、これからきつと君はどんどん進化していくんだろうし、楽しみだなあ……

そういえば、さつき武内くんから夏祭りのチラシを貰ったんだ。7  
××なんだけど、もし君の予定が空いたら一緒に行けないかなと思っただけど……どうかな？あ、予定があるなら無理しなくてもいいからね。

書いて、送ってしまった。だから、もう後には引けない。覚悟はもう決めているんだから、後悔などしない……絶対に。

そして、俺は外の街灯が明るい外の方へと歩き始めた。

Re：無題

こんなに改まって畢兄さんがメールしてくるなんて珍しいね。

あ、もしかして覗き見してた？嫌だなあ、見てるなら一言言ってくれば良かったのに。そしたら、多分もつと頑張ってた……ごめん今の嘘。多分緊張して全然出来なかったと思う。『進化』か……元々陶芸のために始めた事だけど、アイドルとして進化しているならもつと続けてみようかな……

夏祭り！いいよ、予定も無いから！懐かしいなあ……岡山の頃はよく行ってたもんね。毎回私が花火が見れないって駄々こねて畢兄さん抱き抱えてもらってたっけ。折角だから、浴衣があったはずだしそれを着ていくね！楽しみにしてて！

## 浴衣と花火と夏祭りと

夏祭り当日。浮かれる俺を察してか、武内氏が「残りの仕事はこつちでやっておきます」と言ってくれた。サンキュータツケ、やはり敏腕プロデューサーは格が違った。

夏祭り……か……肇は浴衣を着ていくと言っていたし、俺も着ていったほうがいいのかね……ただ、浴衣があったようには思えないからどこかで買ってから行くしかない。

とりあえず銀行で一万円ほどお金を下ろしてしまむ〇で浴衣を買う。俺の180cmを超えないくらいひよろ長の背格好的に、やはり浴衣の色は黒か紺色だろう。柄物とか無理ぽ。俺が着こなせる気がしない。黒ならまだワンチャンあるかもしれないけど白い模様とか入ってるのは無理、絶対に無理。

「これで……いいか」

選んだのは黒に少し薄目の色で掠れた小紋柄。まあ、ここいらが無難なところだろう。多分、柄には見えないし。灰色の帯、下駄も追加で3000円。なんとまあ、安いことだろうか。お財布に優しい、さすがしま〇ら。

さて……あの子はどんなものを着てくるんだろ。

一応、神社の入口で待ち合わせということになった。レッスンの関係で少し遅れて電車で来るらしい。郊外、つまり東京都〇〇区じゃなくて東京都〇〇市みたいな所だからか区内に比べて人が少ない気がしたが、屋台は大繁盛のようで勧誘の音が入口の俺まで響いてくる。

「……畢兄さん、待った？」

「ううん、待ってな……いい……」

肇の声がした気がしたのでそちらを向いたら、その先には女神がいた。薄紫を基調として、色とりどりの花が刷られている可愛くも少し色気がある浴衣で、その上彼女にしては珍しくポニーテールにしているのうなじが見えることによる破壊力がばつ牛ンで致命的な致命傷を負った。

「……うん……その……可愛いよ、本当に……」

「そ、そう？あ、ありがとね……畢兄さんも、よく似合ってるよ」

「そ、そうか……そりゃ、良かった。浮いてそれで心配だったんだ」

意識してしまつて顔がまともに見れない。浴衣効果は偉大だが、それ故に好きな人がやるとここまで殺傷力が高くなるのかと改めて実感した。

「そろそろ行こうか」と言うと、彼女は右手をこちらに突き出してきた。

「……どうしたんだ？」

「手、繋がらない？昔みたいにはぐれないように……ダメ？」

その聞き方は卑怯だろ、肇ちゃんや。それやられて断れる男なんざ誰も居やしないはずだ。少なくとも俺は無理。

そうやって恥ずかしがつているのを悟られないように少し微笑みながら俺が手を出すと、彼女は手を繋ぎ、それどころか指を絡ませる所謂『恋人繋ぎ』にしてきた。やめてくれ、その攻撃は(精神的に)俺に効く。

「さ、行く？」

「……よし、行こうか！」

「何であの子達付き合つてないんですか……」

「本当に、何で今まで付き合つてなかったの……」

「あーもう、まどろっこしいなあ！」

「未央ちゃん、大きな声出したらバレちゃいますって！」

「卯月がさらに大きな声出してどうするの……」

後ろで聞き覚えのある声で騒いでる奴がいる気がしたけどオレ、キコエテナイ、イイネ？

「それにしても、色々な屋台があるもんだなあ……」

「本当……昔は屋台の数が少なかったし……」

「そうだなあ、昔はお好み焼き食べて二人で大喜びしてたもんな」  
「ふふっ、懐かしい」

「それに……射的とかの景品も今みたいにゲーム!とかじゃなかったしな」

「そうだね。ああいうのってどこから持ってくるんだろ……」

「さあ、な……おや、噂をすれば射的があるけど……やるか?」

「……うん!昔の私とは違うんだから!」

「おお?そりや楽しみだな?」

少し煽るように声をかけると肇は心外だと言わんばかりに頬をぷくぷくと膨らませてこちらを見てきた。やっぱり可愛いっすね(語彙力)

屋台の店主と思われるおっちゃんに400円を渡し、二人分の銃とコルク弾を貰う。そうそう、このボルトアクションっぽいやつだよ。昔は腕力がなくて毎回おじいさんにリロードしてもらってたっけ。

「お兄さん方、机から身を乗り出すのはいいがくれぐれも地面から足を離すなよ。足を離して撃ったやつが倒れてもノーカウントだからな」

『はい!』

「……おうおう、仲睦まじいこった」

二人揃って返事をするとおっちゃんはニヤニヤしながらこちらを見てきた。俺らが何をしたらって言うんだよ!

横では、肇が弾込めをやり終えたようでちゃんと足をベタ付けしながら身を乗り出している。狙う先にはさっき言っていたぬいぐるみ……ぴにやだっけ。ブサ可愛いとか言われる系のやつだろうか、目元が武内氏に似ている気がしなくもない。

そうこうしている内に肇が一発撃ったが狙いとは見当違いの下ラムネに当たって、落ちた。待てや、何がどうなったら下に行くねん。

「……計画通りです」

「なーにが計画通り(キリッ)だ、どうして下に行ってるんだよ」

「……キリッまでは行ってないじゃない……!見てて、絶対にあのぬいぐるみを撃ち落としてあげるんだから……!」

二発目も見当違いの方向へ。しかし三発目からはようやく当たり出した。胴体、頭と二発連続で当ててそろそろ落ちそうという時だっ

た。

ラストの五発目。肇がさつきと変わらない体勢で撃とうとした、その時だった。

「……………うひっ!」

「……………うひっ?」

「……………お腹が……………腹筋が攣っちゃった……………」

射的あるある、腹筋が攣る事件。いつも使わない筋肉を使っている人が多いから、無理な体勢でやるとこんなふうにお腹筋が攣るのだ。小学校の頃の俺も何度か攣ったことがある。

「おっちゃん、この子のラストこっちで撃つていい?」

「……………いつもならダメだが……………今回は許してやる、無念を晴らしてやれ」

「……………うっす!」

こちらもベタ付けで身体を乗り出してぬいぐるみに銃口を近づける。その距離は肇がやっていた頃よりも遥かに近かった。身長と腕の長さはここで活かされるのだよ、ピアノの時に役立つことはないけど。

息を一つ吸い込んで、狙いを定め……………そして放つ。放たれた弾は吸い込まれるようにしてぬいぐるみへと突き刺さり、そしてそのまま後ろのネットの方に落ちていった。

「お、おめつとさん!」

「よっしや、おっちゃんありがとな!」

「いいってことよ、おい嬢ちゃん。アンタの連れがぬいぐるみ取ったぞ」

「いたたっ……………えっ? 本当!」

「マジマジ、ほれ」

おっちゃんから渡されたぬいぐるみを見せると肇は大喜びでぴよんぴよん跳ねて喜びを表現した。その姿が子供の頃と全く同じで面白くてつい笑ってしまう。すると彼女は「なんで笑うの」とまた頬をぷくーつと膨らませて拗ねてしまった。でも、なんだか嬉しそうな顔をしていた。



「……………ぐはっ」

「卯月ー!?」「しまむー!?」

「……………所詮彼女は三人の中で最弱……………」

「何ボスつぽくカツコつけてるのしぶりん」

「……………でも、流石にあそこだけ空気が甘過ぎない?」

「わかりみが深い」

誰か一人倒れている気がするが、多分俺の気の所為。そうであつて欲しい。

そんな俺の不安とは真逆に肇は夏祭りを満喫しているようで、楽しそうな声が聞こえてくる。

「畢兄さん! たこ焼き食べよ、 たこ焼き!」

「わかった! わかったから走るのやめてくれ!」

引つ張るのはやめてくれたが、「もう待ちきれない」と言わんばかりに目を輝かせてこつちを見るのもやめてほしいなって思つちやダメですか……………ダメですよね分かります可愛いもん。

「たつこ焼きー、 たつこ焼きー」

「……………お前、そんなにたこ焼き好きだっけ?」

「別に好物つてわけじゃないけど……………」

「じゃあ何で……………」

「それは……………一緒に食べられるから。一緒に食べた方が美味しい、でしょ?」

「……………そうだな」

そんなことを唐突に言われたら、顔が赤くなってしまふ。何でこの子こんなに尊いことしか言えないんだ……………

肇も素面で言い放つたように見えるが、耳が赤くなっているのも多分恥ずかしがっているのだろう。もし恥ずかしがってなかったらそれはとても怖い女という事だ。良かった良かった。

屋台の店主に500円を渡し、船に入った八個のたこ焼きを受け取る。湯気が出ていて出来たてはやほやのようだが、出来たてに付きま

とうのが熱さである。たしか、肇は猫舌だった気が……

「ふーっ、ふーっ、ふーっ……」

知ってた。なんかやるんだろうなと思ったら本当にやってた。その様子は昔の子供の頃を連想させてくれた。やはりあの頃と変わってないところは多いんだな……

「あ、あふっ……美味しい」

「そうか……良かった」

熱さからか少し涙目で笑っている肇と一緒に食べるたこ焼きは、いつも居酒屋で食べるたこ焼きの数倍は美味しく感じた。

「うっ……」

「しぶりん!」

「未央……後は……頼んだよ」

「しぶりーーん!!!」

「金魚すくい、か」

「畢兄さん、金魚すくい苦手だもんね……」

「七年経ってるんだし、得意になってると信じたい」

「わからないよー?もつと下手になってるかも」

「そりゃ困る」

店主に600円払って二人分のポイと器を貰う。器に少し水を入れ、戦闘態勢に入る。慎重にポイを水に付け、金魚の真下に滑り込ませるとスツと上に持ち上げた。すると、ポイの上で金魚が暴れだしてしまい、真ん中からごっつそりと持って行かれて破れてしまった。

「あーあー、破れちった」

「えっ!?もう破れたの!」

心外な、破りたくて破ったわけじゃない。そう思っていると肇はポイを水につけ始めた。その目はまるで獲物を狩るハンターのよう……あれ、溪流釣りでもこんな目をしていた気がするぞ?・

そんなことを思っているあいだに肇はポイポイと金魚をお椀の中に入れていく。あれ?上手いな!?

三匹になった所でポイが破れてしまったが、三匹取れているだけで俺からしたらすごいことだと思った。

「すごいな、練習してたのか？」

「うん、少しね」

「ったく、ずるいぞそれ」

他愛もない会話をしながら店主に金魚を袋の中に入れてもらう。それを肇が貰ったその姿は、浴衣とのコントラストのせいかとても綺麗に見えた。

「うっ………いや、まだ私が倒れるわけにはいかない。倒れちゃったしまむーやしぶりんの為にも、最後まで見届けなきゃ……！」

今回の夏祭りの舞台となっている神社の隣には大きな川が流れている。どうやらそこを利用して花火を打ち上げるらしい。

神社の本殿の途中の階段に座って、肇の仕事の話なんかを聞いていると、時間になったのか屋台の明かりがほとんど消えてしまった。そして……ドーン！という大きな音とともに金属の炎色反応によって起きる綺麗な色が空に大輪を咲かせていた。

『綺麗……』

思わずそんな言葉がこぼれる。それは彼女も同じだったようで、言葉がハモってしまった。顔を見やって微笑み合う。キザな奴ならここで「君の方が綺麗だよ」とか言うんだろうけど、俺には言えない。だって、俺はチキンだから。好きなことをやりたいって言って中途半端に逃げたチキン野郎だから。

でも……でも、ここで言わなかったらいつ言うんだ……！

「なあ、肇」

「……ん？何？」

肇が俺の声に反応してこっちを見てくる。その瞳に、今パツと光った花火が映ってとても綺麗で、俺に勇気をくれた。

「この際だから、言っちゃおうわ」

「……うん」

「俺さ……」

——お前のことが好きだわ」

「……………そう、なんだ」

背後で花火が上がる音と、それに呼応して上がる歓声が聞こえてくる。その歓声は、まるで俺が言ったことを応援してくれているような気がして——

「正直、ここに入ったばかりの時にお前と会った時は驚いたよ。だって、全然違うんだもの。姿もすっかり大人に変わって、性格も大人びて……」

「……………うん」

「でもさ……そんなお前が誰かに取られるのは、俺は嫌なんだよ。独りよがりな独占欲かもしれないけど、俺はお前と、『付き合いたい』んだ」

「……………うん」

「だから、改めて言うよ。お前のことが好きだ、だから俺と付き合っほしい」

言い切った。渾身の出来だと自分でも思う。あとは肇自身の返答を待つだけだ。

少しの静寂のあと、花火がまたひとつパツと上がって、俺たちの顔を照らした。その時に見えた肇の顔は、泣いていた。

「私……嬉しいの。畢兄さんにそうやって言ってもらえて、すごい嬉しいの」

繋いでいた手がさらに強く握りしめられる。まるで、もう離れたくないと言わんばかりに、強く握られる。

「私も……兄さんの事が、好きだよ。だから……こちらこそ、よろしく願います……?」

「……………マジで?」

「マジ、だよ」

そう言うと、彼女は花火がなくなり、俺が彼女のことが見えなくなった隙を利用して——

頬に、柔らかい感触。

何が起きたかわからないまま、目を白黒させていると彼女は笑ってこちらを見てきた。それと共に目玉の一号花火が大輪と爆音を空に響かせた。それで照らされた肇の顔は赤かったが、それは花火の光の色か、それとも――

「あつ、ダメつ、尊い……………」